

中学生の作文に見られる「 八」の重複：主題を引き継ぐ文脈での文法的なつまずき

著者	山下 直
雑誌名	人文学教育研究
号	41
ページ	27-38
発行年	2014-08-13
その他のタイトル	A reduplication of particle "wa" appearing in student's compositions : The grammatical stumble in context taking over topic
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123510

中学生の作文に見られる「〇〇ハ」の重複 ——主題を引き継ぐ文脈での文法的なつまずき——

山下 直

0. はじめに

平成21年度全国学力・学習状況調査中学校国語A問題において、「この（＝「モナ・リザ」の）絵の特徴は、どの角度から見ても女性と目があいます。」という「ねじれた文」を修正する問題が出題され、正答率が50.8%という低い数値であったことに関心が集まった。国立教育政策研究所の解説資料^①の「主語（主部）に対応させて述語（述部）を適切に書くこと」という出題の趣旨に照らせば、全国の約半数の中学3年生が主述の対応を吟味する能力を十分に身に付けていないおそれがあるということになる^②。

口語文法学習の研究においても学習者の「ハ」の用法への関心は高まっている。松崎史周（2014）^③では、中学1年生が書いた意見文33本に14例、読書感想文28本に53例、「ハ」の用法に関わる文法的な不具合が出現したとされている。また、伊坂淳一（2012）^④では学習者の「ハ」の不適切な用法を、「主語・述語に関する整合性」および「主題表現に関わる「は」と「が」の選択」の二つに分けて捉え、中学1年生の作文219本にそれぞれが13例、12例、中学2年生の作文339本に10例、12例、中学3年生の作文206本に7例ずつ出現したとされている。

ここで注目したいのは、伊坂（2012）の出現頻度の低さである。松崎（2014）の分析した作文総数が少ないため、伊坂（2012）と単純に比較できないかもしれないが、出現頻度を見る限り、松崎（2014）では学習者が「ハ」の用法に課題を抱えていると捉えることに問題はない一方で、伊坂（2012）はむしろそれほど大きな課題を抱えてはいないとも捉えられるような低い出現頻度となっている。両者の出現頻度に違いが出た要因を探ることは簡単ではないが、少なくともその背景に、学習者が一様に、同じ文法的な不具合を同じような頻度で引き起こすわけではなく、どのような文章を書くのか、どのような作文指導を受けてきたかなどのさまざまな要因があることを考慮する必要があるだろう^⑤。だとすれば、分析する資料に合わせて、文法的な不具合を捉える視点を適切に設けなければ、学習者の実態に迫ることは難しいことになる。そこで、本稿では以下の手順で、学習者の「ハ」の用法を分析していくこととする。

- ・分析する資料に用いられている「ハ」の全てについて不具合のあるものとならないものに分ける。
- ・不具合がある例について、特に出現頻度の高いものに着眼する。
- ・出現頻度の高いものの不具合が、学習者の文法的感覚と関わりがあるかどうかを吟味する。
- ・文法的感覚と関わりがあると判断されれば、その現象を学習者の文法的なつまずきの一つとして捉える。

具体的には、文法的規範から逸脱していない「省くことができる〇〇ハ」に着眼し、その中に文法的なつまずき⁶⁾と捉えてよい出現頻度の高い現象が見られることを述べる。

1. 分析対象とする「〇〇ハ」

分析した資料は、山下直 (2010)⁷⁾、山下直 (2011)⁸⁾と同じ、2008年6月に東京都内の私立中高一貫女子校の中学1年生199名が書いた「オツベルと象」(宮沢賢治)のあらすじである⁹⁾。作文の総文数は2411文、199名全員が「ハ」を使用しており、使用総数は1988例であった。本稿では、それらをまず次のように整理した。

(ア)「ハ」の用法に特に問題がないもの…1670例

(イ)「ハ」を提示する必要があるのに提示しているもの…304例

(ウ)「ハ」の結びが適切でないもの(いわゆる主述のねじれ)…14例

これらのうち、特に問題がない1670例を除いた(イ)(ウ)について述べる。(イ)の「「ハ」を提示する必要があるのに提示しているもの」とは、以下に示すようなものである。(例文(1)と(2)は連続しているが、説明のために個別の例文番号を与えた。以下、行空けせずに引用した例文はいずれも連続している。)

(1) オツベルは、ドキッとしながらも、象にここにいるように勧め、象を自分の財産とした。

(2) そして、オツベルは、好感を持たせることと、逃げさせないのを目的に、時計、靴など重いものをプレゼントした。

(2)は、下線部の「オツベルは」を省いて、

(2)′ そして、好感をもたせることと、逃げさせないのを目的に、時計、靴など重いものをプレゼントした。

として、(1)の「オツベルは」との重複を避けると、(1)×(2)をまとまりのある一連の出来事として示せ、文の接続がより自然になるように思われる。なお、(イ)には次のようなタイプのものもある。

(3) オツベルは、十六人の百姓をやとって仕事をしていた時、一頭の白象がやってきた。

(3)の下線部の「オツベルは」は、正しくは「オツベルが」とすべきである。本来「〇〇ガ」を提示すべき箇所に、「〇〇ハ」が提示されているわけであるから、「ハ」を提示する必要があるのに提示している例とすることができる。これは、伊坂 (2012) が「主題表現に関わる「は」と「が」の選択」として捉えている例であるが、(2)のタイプが300例見られるのに対し、このタイプは4例しか見られず、出現の頻度に大きな差がある。

次に、(ウ)の「ハ」の結びが適切でないもの」は以下のようなものである。

(4) この話は、ある牛飼いが物語っている話です。

(4)は「この話は」に対する結びが「話です」となっている点が問題であり、正しくは

(4)′ この話は、ある牛飼いが物語っているものです。

などとすべきである。これは、伊坂（2012）が「主語・述語に関わる整合性」、松崎（2014）が「主述の不具合」として捉えている例である。また、(イ)(ウ)とは別に、次のような例がある。

(5) 象が弱るほど、オツベルは象につらく当たるようになっていった。

(6) そして、十一日の月を見て、_____仲間に「助けてくれ。」と手紙を出す。

(6)は下線部に提示すべき「白象は」が提示されていない。このような例は全体で55例見られるが、「ハ」が出現している例ではないので「ハ」の全使用例1988例には含めていない。ただ、「ハ」を提示すべき箇所提示していないという点では欠陥のある例と言える。

このように、何らかの問題を含んでいる「ハ」の用法については、

A) 「ハ」を省くことができるのに提示しているもの…300例

B) 「ガ」とすべきなのに「ハ」を提示しているもの…4例

C) 「ハ」の結びが適切でないもの…14例

D) 「ハ」を提示すべきなのに提示していないもの…55例

の4つのタイプがあることがわかる。これらのうちB)は伊坂（2012）が主題表現に関わる「は」と「が」の選択に課題があるものとして取り上げている例で、C)は伊坂（2012）が主語・述語に関わる整合性の課題、松崎（2014）が主述の不具合として取り上げている例である。

出現数を見るとB)、C)は18例に過ぎず、この点において本稿で分析した資料は伊坂（2012）と同様の傾向を示している。一方、A)は300例で突出して多く出現している。ただ、B) C) D)が文法的に誤った用法と言えるのに対して、A)は文法的に誤った用法とは言えないものである。しかしながら、(1)(2)の「オツベルは」の重複は避けるべきものであり、よりよい表現を目指すという見地からは適切さに欠けている例と言ってよい。したがって、本稿で分析対象としている資料における「ハ」の用法の課題を、学習者の実態に即して明らかにするためには、A)のような例を分析の対象にすることが必要であると考えられる。

2. 重複連文

前節では、本稿で分析対象とした資料においては、出現する用例数から見て、学習者の実態に迫るためには「省くことができる〇〇ハ」の分析が必要であると指摘した。だが「省くことができる」というのは「省かなくてもよい」ということでもあり、どこまでを許容し、どこまでを許容しないかの判断の客観性を保てない限り、分析するのは困難と言わざるを得ない。

ただ、それらの中に積極的に「省いた方がよい」と判断されるものが含まれているのも確かである。そして、誤りとは言えないが適切さに欠ける表現を、より適切に修正する能力を身に付けさせることもまた、学習者の表現能力の向上のためには重要なことである。そこで、まずは、「省くことができる〇〇ハ」にはどのようなものがあるのかを、もう少し細かく見ていくことにする。

「省くことができる〇〇ハ」は、連続する文に同じ「〇〇ハ」が重複して出現する場合に生じる現象である。

- (7) オツベルはとても賢く、白象に親切を装いながら、白象を自分の財産にしようと考える。
- (8) オツベルは、白象にその考えを気づかれないようにしながら、白象が森へ逃げないようにする。
- (9) オツベルは、税金が上がったとうそをつき、白象を一日中働かせる。

(8)(9)は、(7)で提示された主題「オツベルは」を引き継ぐ文脈となっており、その点で(8)(9)の下線部の「オツベルは」は、(7)で提示された「オツベルは」と重複して提示されていると言える。そこで重複を避け、次の(8)′(9)′のように改めることができる。

- (7) オツベルはとても賢く、白象に親切を装いながら、白象を自分の財産にしようと考える。
- (8)′ そして、白象にその考えを気づかれないようにしながら、白象が森へ逃げないようにする。
- (9)′ さらに、税金が上がったとうそをつき、白象を一日中働かせる。

(7)(8)(9)は、いずれも「オツベルは……スル」型の文が並んでいるため、出来事を箇条書きのように断片的に羅列しているような印象を受けやすい。しかし、(8)(9)の下線部「オツベルは」を省くとともに接続詞を補うことで、「オツベルは」の重複が解消され自然な文の連接となっている。このような場合の「〇〇ハ」は、「省いた方がよい」レベルにあると判断してよいと思われる。一方、次の(10)(11)と(10)(11)′の場合はどうであろうか。

- (10) そして、屋敷へ着くと、中へ入ろうと、象たちは、暴れながらも白象に向かって優しい声をかけながら、救出しようとする。
- (11) やっと門が開くと、象たちはオツベルを踏みつぶして白象を無事助け出した。

(10) そして、屋敷へ着くと、中へ入ろうと、象たちは、暴れながらも白象に向かって優しい声をかけながら、救出しようとする。

(11) やっと門が開くと、_____ オツベルを踏みつぶして白象を無事助け出した。

(11)の下線部「象たちは」は、(11)'のように省くことも可能である。しかしながら、(8)(9)の「オツベルは」とは異なり、「省かなくてもよい」という判断も十分にあり得るように思われる。(8)(9)の「〇〇ハ」が文頭に出現しているのに対して、(11)は「やっと門が開くと」という節の後に出現している。このため、(8)(9)のように「〇〇ハ」が重複しているという印象を読み手に与えにくくなるのが、その要因の一つであると考えられる。

さらに、(12)(13)はどうであろうか。

(12) そうしたら、稲こき機械が面白くて、象はオツベルの所にずっといることになりました。

(13) オツベルの財産になった象は、オツベルに鎖や分銅を付けられて、大変な仕事をさせられました、喜んでやっていました。

(13)の「象は」には「オツベルの財産になった」という連体修飾成分が附されているため、この部分の「象は」だけを省くことはできない。

このように、連続する文に同じ「〇〇ハ」が重複して出現する例には、(8)(9)のように文頭に出現していることで積極的に「省いた方がよい」ものから、(11)のように節の後に出現することで「省く必要がない」ものや、(13)のように連体修飾成分の後に出現することで「省くことはできない」ものまでさまざまなレベルのものが混在しているのである。したがって、単に連続する文に同じ「〇〇ハ」が重複して出現しているからと言って、それらを一括りに扱うことはできない。

そこで本稿では、(8)(9)の「オツベルは」のように、「〇〇ハ」が提示された文の直後の文頭に、重複して同じ「〇〇ハ」が出現している例に着眼することとする。先にも述べたように、このタイプのものは、直前の文に提示されている「〇〇ハ」との重複を強く感じ、「省いた方がよい」という判断が優勢であるものが多く見られる。したがって、このような例を集めることで、「省いた方がよい」と判断されやすい例を集めることができると考えられる。

そこで本稿では、このような重複して文頭に出現する「〇〇ハ」の分析を通して、学習者の「ハ」の用法のつまずきの実態に迫ることを試みる。なお、このような連文を便宜的に「重複連文」と呼ぶことにする。

3. 重複連文の「省かない方が自然な〇〇ハ」

前節では、「省くことができる〇〇ハ」のうち、「〇〇ハ」が提示された直後の文の文頭に、重複して同じ「〇〇ハ」が出現する例を分析の対象とすることを述べた⁽⁴⁰⁾。このような例は146例あり、大まかな分布は以下のようになっている。

- * 「○○ハ」を省く方が自然に感じられるもの…………… 125例
- * 「○○ハ」を省かない方が自然に感じられるもの……… 10例
- * 省いても省かなくてもどちらでもよいと感じられるもの……… 11例

重複連文の中にも「○○ハ」を省かない方が自然と思われるものが10例あり、それらは以下に示す(14)(15), (16)(17)のようなものである。

- (14) オツベルは, お金持ちでずる賢い人です。
- (15) オツベルは, 稲こき機械の六台も据えつけた仕事場で, 大きな琥珀のパイプをくわえ, 両手を背中に組んで, ぶらぶら行ったり来たりしていました。
- (16) 結局, オツベルは白象の仲間につぶされ, 白象は無事助けられた。
- (17) その時, 象はさびしく笑っていた。

(14)(15)では, (15)の「オツベルは」を省いた場合,

- (14) オツベルは, お金持ちでずる賢い人です。
- (15') 稲こき機械の六台も据えつけた仕事場で, 大きな琥珀のパイプをくわえ, 両手を背中に組んで, ぶらぶら行ったり来たりしていました。

となる。(15')の文頭に「そして」などの接続表現を補うことも考えられる。しかしながら, 次に示す(15'')のように「オツベルは」を「彼は」と置き換える方が, より文の接続が自然になるように感じられる。

- (14) オツベルは, お金持ちでずる賢い人です。
- (15'') 彼は, 稲こき機械の六台も据えつけた仕事場で, 大きな琥珀のパイプをくわえ, 両手を背中に組んで, ぶらぶら行ったり来たりしていました。

このように, オツベルがどのような人物か, その属性や性格などを説明した後に, オツベルの行動について述べる場合は, 重複連文になっていても直後の文頭の「オツベルは」を省くのではなく, 「彼は」などと置き換える方が据わりがよいように感じられる。

次に, (16)(17)においても, (17)の「象は」を省き,

- (16) 結局, オツベルは白象の仲間につぶされ, 白象は無事助けられた。
- (17') その時, さびしく笑っていた。

とするよりも、(17)のように「白象は」が示されている方が据わりがよいように感じられる。これは、(16)に「オツベルは」と「白象は」という二つの主題が提示されているために、(17)の文頭には「オツベルは」も出現する余地を残しているので、「白象は」を明示する方が書き手の意図をより明快に伝えることができるということに因ると考えられる。

このことから、重複連文においても、必ずしも「○○ハ」を省く方が自然であるとは言えないものもあることがわかる⁽¹¹⁾。本稿では、これらを除いた125例を主たる分析の対象とする⁽¹²⁾。

4. 重複連文の「省いた方が自然な○○ハ」一文法的不適格ではない文法的つまずき—

前節で主たる分析の対象とするとした125例に最も多く見られるのは、先の(7)(8)(9)に示した「○○ハ」を省くとともに接続表現を新たに補うものである。以下に再掲する。

- (7) オツベルはとても賢く、白象に親切を装いながら、白象を自分の財産にしようとする。
- (8) オツベルは、白象にその考えを気づかれないようにしながら、白象が森へ逃げないようにする。
- (9) オツベルは、税金が上がったとうそをつき、白象を一日中働かせる。

- (7) オツベルはとても賢く、白象に親切を装いながら、白象を自分の財産にしようとする。
- (8) そして、白象にその考えを気づかれないようにしながら、白象が森へ逃げないようにする。
- (9) さらに、税金が上がったとうそをつき、白象を一日中働かせる。

他には、次の(18)(19)(20)のようなタイプのものもある。

- (18) 百姓たちはぎょっとしたが、オツベルは怖い気持ちをかくしながらも、何か悪知恵を働かせているようだった。
- (19) そして、オツベルは白象を上手にだまし、自分のものにすることができた。
- (20) オツベルは白象が自分のものになってからも、時計だの靴だのをあげるふりをして、鎖や分銅を象の体に付けた。

- (18) 百姓たちはぎょっとしたが、オツベルは怖い気持ちをかくしながらも、何か悪知恵を働かせているようだった。
- (19) そして、 白象を上手にだまし、自分のものにすることができた。
- (20) 白象が自分のものになってからも、時計だの靴だのをあげるふりをして、鎖や分銅を象の体に付けた。

(19) (20) は接続表現などを補うことなく、単に(19)(20)の「オツベルは」を省いただけとなってい

る。このように、単に「オツベルは」を省くだけのものには、(19)のようにもともと用いられている接続表現をそのまま生かすタイプのものと、(20)のようにもともと接続表現などが用いられていないものがある。

また、次の(21)(22)では、(22)の「オツベルは」を省くだけでなく、「すると」を「そして」などに置き換える方がよい。

(21) オツベルは、その白象にとってもおびえながらも、そのような感情を出さずに、ずっとこっちにいたらどうだと話しかけ、自分のものにしました。

(22) すると、オツベルは、白象に時計などをプレゼントします。

(21) オツベルは、その白象にとってもおびえながらも、そのような感情を出さずに、ずっとこっちにいたらどうだと話しかけ、自分のものにしました。

(22) そして、 白象に時計などをプレゼントします。

ここまで見てきた重複連文の「省いた方がよい〇〇ハ」には、

- a. 接続表現などを伴わず単に「〇〇ハ」を省くだけのもの
- b. もとの文の接続表現を残して、「〇〇ハ」を省くもの
- c. 新たに接続表現を補って、「〇〇ハ」を省くもの
- d. 別の接続表現に置き換えて、「〇〇ハ」を省くもの

が見られた。これらは「〇〇ハ」を省く以外にも、接続表現を補ったり置き換えたりなどの操作を必要とするものもあるが、いずれも機械的な文法的操作で修正が可能な点で共通している。つまり、a. b. c. d. に該当する「省くことができる〇〇ハ」は、いずれも文法的規範に照らして不適格ではない（文法的な誤りは犯していない）が、より適切な表現に改める際に文法的感覚を要するものである。さらに、125例中123例が何らかの形で上に示したa. b. c. d. のいずれかに該当している⁽⁴³⁾。この数値は「省くことができる〇〇ハ」300例の41%にあたり、同じ主題を引き継ぐ文脈で、重複して文頭に同じ「〇〇ハ」を提示する学習者が少なくないことを示している。

このようなことから、同じ主題を引き継ぐ文脈が作文の中に生じやすい場合、学習者は重複して文頭に同じ「〇〇ハ」を提示する傾向があり、その現象の修正には文法的感覚を要することから、それらの現象を学習者が抱えている文法的なつまずきの一つと捉えてよいことがわかる。

本稿では、「省くことができる〇〇ハ」に着眼することの必要性を主張し、重複連文の文頭に出現する「〇〇ハ」の分析を試みた。その結果、同じ主題を引き継ぐ文脈において、重複して文頭に同じ「〇〇ハ」を提示する現象が高い頻度で出現していることが確認され、それらが機械的な文法的操作で修正可能であることから、学習者の「ハ」の用法の文法的なつまずきの一つとして捉えられることを指摘した。

5. 文法的つまずきの解消だけでは十分に修正できない例

さて、125例のうちの残りの2例は、(23)(24)のように機械的な文法的操作では修正できないものである。

(23) そのうち、象は笑うどころか赤い眼でオツベルを見下ろすようになった。

(24) ある晩、象は象小屋でわらを食わずに、空に語りかける。

(24)の「象は」は(23)の「象は」と重複しているが、(24)の「象は」を省いて「そして」を補ってみても、

(23) そのうち、象は笑うどころか赤い眼でオツベルを見下ろすようになった。

(24) そして、ある晩、小屋でわらを食わずに、空に語りかける。

のようになり、(23)の「赤い眼でオツベルを見下ろすようになった」ことと、(24)の「小屋でわらを食わずに、空に語りかける」ことにどのような関わりがあるのかがわかりづらく、意味の捉えにくい連文となっている。つまり、もともとの連文自体が、前後の内容にやや飛躍があるものとなっているために、「〇〇ハ」の重複を避けたり接続表現を補ったりするといった機械的な文法的操作だけでは、自然な文接続にすることが難しいのである。

このようなタイプのものは、次の(25)(26)のように、もとの連文には示されていない情報を補ったり、表現の言い回し自体を変えたりする必要がある。

(25) そのうち、象は疲れてきて、笑うどころか赤い眼でオツベルを見下ろすようになった。

(26) そして、とうとうある晩、わらも食べられないほどに疲れ果て、空に語りかける。

(7)(8)(9)、(18)(19)(20)、(21)(22)を修正する場合には、「〇〇ハ」を省く、接続表現を改めるといった機械的な文法的操作で修正が可能であった。一方、(23)(24)の場合は、「〇〇ハ」を省くなどといった文法的操作では修正できない。(23)(24)は文法的感覚の不足ではなく、表現のヴァリエーションや語彙に関わる感覚の不足が、自然な接続を妨げる主要な要因となっていると考えられる。したがって、このような例を適切に修正するためには、「ハ」の用法についての文法的な感覚を育成するだけでは十分ではないということになる。

また、文法的操作で修正できるとした123例の中にも、表現のヴァリエーションや語彙に関わる修正を加えた方が、さらによくなると考えられるものが19例見られる。

(34) 象は、合計五百キロもある鎖と分銅を付け、毎日大変な仕事をこなしていったが、日に日に象の御飯の量が少なくなっていく。

(35) そして、象は弱っていった。

(36) ある日、象は、お月様と赤い着物の童子がくれた手紙を仲間に宛てて出した。

(34)(35)(36)を文法的操作のみで修正すると次のようになる。

(34) 象は、合計五百キロもある鎖と分銅を付け、毎日大変な仕事をこなしていったが、日に日に象の御飯の量が少なくなっていった。

(35) そして、_____弱っていった。

(36) そこで、_____お月様と赤い着物の童子がくれた手紙を仲間に宛てて出した。

(34)と(35)だけを見れば、象が弱っていったことを結果的な事実として示していると考えることができ、これまで同様に(35)の「象は」を省くという操作のみで修正が可能である。また、(36)の「手紙」を「出した」理由を(35)の「弱っていった」ことと捉えることができるので、文意が不明ということもない。しかしながら、(34)の「象は」は(36)にも引き継がれている点をふまえると、(35)は(36)とのつながりを考えて(35)''のように、

(35)'' そのため、だんだん弱っていった。／そのため、すっかり弱ってしまった。

などとする方が望ましいと考えられる。さらに、(36)はもとの作品の内容との齟齬もあるので、その点を合わせて(36)''のように修正されるべきと言える。

(36)'' そこで、(象は) お月様と赤い着物の童子がくれた筆と硯で、助けを求める手紙を仲間に宛てて出した。

(35)'' で「そして」を「そのため」に改めるのは接続表現の置き換えであり、文法的操作による修正である。しかしながら、「だんだん」「すっかり」などの副詞的表現を補ったり、「弱っていった」を「弱ってしまった」のように改めたりするのは表現のヴァリエーションや語彙に関わる修正である。同様に、(36)''では「象は」を省いたり接続語を補ったりといった文法的操作だけでなく、「筆と硯で」「助けを求める」などの語句を補っている⁽⁴⁾。つまり、(35)(36)の接続をより適切にしようとするなら、文法的操作に加えて表現のヴァリエーションや語彙に関わる修正を加える方がさらによいということになる。このことは、主題が引き継がれている文脈で、重複して文頭に同じ「○○ハ」を提示する現象には、学習者の「ハ」の用法の文法的なつまづきを捉えることができるものの、そのつまづきを解消するだけでは文接続を自然なものに修正するには十分とは言えない場合もあることを示唆している。拙い表現の要因には、文法的側面だけでなく語彙的側面が深く関わっているのである。

6. まとめと今後の課題

本稿では、松崎史周（2014）と伊坂淳一（2012）において、学習者の「ハ」の用法の文法的な不具合の出現頻度に大きな違いが見られることに注目し、資料に合わせた適切な分析の視点が必要であることを主張した。本稿で分析した資料の「ハ」の用法を見てみると、主述のねじれや、「ハ」と「ガ」の選択の問題については出現頻度が低かったが、「省くことができる〇〇ハ」の出現頻度が他に比べて突出して高かったため、文法的には誤りとは言えないが、学習者の実態に迫るためにはこの点に着眼することが必要であることを主張した。

しかしながら、「省くことができる〇〇ハ」の「省くことができる」程度はさまざまであり一括して扱うことはできない。そこで、本稿では「省いた方がよい」と判断できるものが多く見られる重複連文に絞って分析した結果、同じ主題を引き継ぐ文脈では、重複して文頭に同じ「〇〇ハ」を提示する現象が多く見られた。これらの現象は、文法的に不適格ではないが、より適切な表現に改める際に文法的な感覚を要する点で、文法的なつまずきと捉えてよいと考える。とはいえ、これらの中には、文法的なつまずきを解消するだけでは自然な文連接とするのに十分でないものも含まれ、問題の全てを文法感覚の育成のみで解決しようとするには限界があることも認識しておく必要がある。

このように、本稿の分析は学習者の「ハ」の用法のほんの一端を垣間見たにすぎない。今後は接続表現との関わりや、「〇〇ハ……シタ（スル）」型の文の羅列という観点から一文ごとに主題が入れ替わる現象も視野に入れ、分析を行っていく必要があると考えている。また、本稿では主題を引き継ぐ文脈に現れる「〇〇ハ」の用法に、学習者の文法的つまずきを捉えたが、文脈を視野に入れて分析をする場合、文を越えた範囲で「ハ」を考察する文章論の視点からの分析、考察も欠かすことができない⁽¹⁵⁾。

このようにまだまだ多くの課題が残されているが、今後はどのような現象を文法的つまずきと捉えるかということだけではなく、それらを生じさせる要因は何かということについても詳しく捉えていくことも重要となる。これらについては稿を改めて論ずることとしたい。

注

- （1）「平成21年度全国学力・学習状況調査解説資料 中学校国語」国立教育政策研究所教育課程センター 平成21年4月 p.12。
- （2）この問題については「名詞述部で受けにくい主題名詞句」という観点からの研究が進められている。安部朋世・橋本修（2014）「いわゆるモノリザ文に対する国語教育学・国語学の共同アプローチ」第126回名古屋大会研究発表要旨集，全国大学国語教育学会，pp. 273－276 参照。
- （3）松崎史周（2014）「中学生の作文に見られる「主述の不具合」の分析―出現傾向と発生要因を探る―」第126回名古屋大会研究発表要旨集，全国大学国語教育学会，pp. 319－322。
- （4）伊坂淳一（2012）「中学生の日本語表現における文法的不適格性の分析」千葉大学教育学

部紀要，第60巻，pp. 63－71。

- (5) 松崎 (2014) では「冒頭文に主述の不具合が多く現れ，そのほとんどが作文テーマを主語に取り込んだものだった (p 321)」とある。伊坂 (2012) にこの傾向が見られたかどうか言及はないが，何らかの要因で伊坂 (2012) の学習者には，作文テーマを主語に取り込んだ文で書き出す者が多くいなかったとすれば，出現頻度に違いが出たことも首肯される。
- (6) 文法的規範に照らして明確な誤りと位置付けられないが，適切さを欠くと判断される表現を視野に入れることから，不適格，誤りとは言えないという意味で本稿では便宜的に「つまり」 という語を用いることとした。
- (7) 山下直 (2010) 「学習者の文型選択意識と文法学習—表現能力の育成につながる文法学習に向けて—」人文科教育研究，第37号，pp. 7－19。
- (8) 山下直 (2011) 「接続の表現形式の選択に対する学習者の意識—言語運用能力向上につながる文法学習に向けて—」人文科教育研究，第38号，pp. 25－36。
- (9) 0. で取り上げた平成21年度の全国学力・学習状況調査問題は中学生を対象とした調査であること，松崎 (2014)，伊坂 (2012) も中学生の作文を資料としていることから，本稿で中学1年生が書いたものを資料とすることの妥当性に大きな問題はないと考えている。ただし，本稿の主眼は学習者の「ハ」の用法に問題があるとすれば，それはどのようなものかを捉えることにあるため，現段階では発達段階までを視野に入れた論考を展開するに至っていない。したがって，なぜ2年生や3年生ではなく1年生なのかという指摘に應えるだけの十分な準備がないことも確かであり，その点は今後の課題と認識している。
- (10) 文頭に出現するとしているが，「○○ハ」の直前に句レベルの接続表現，副詞的表現が出現している場合も含めた。
- (11) 「省かない方が自然に感じられるもの」10例のうち，(14)(15)タイプが6例，(16)(17)タイプが3例，その他が1例となっている。
- (12) 「省いても省かなくてもどちらでもよいと感じられるもの」11例についても，「省かない」という選択肢が残されているので分析の対象から外している。
- (13) 123例のうち，a. …2例，b. …50例，c. …64例，d. …10例となっている。ただし，b. とc. に重複が3例ある。
- (14) (36)'で「象は」を省かなくてもよいという判断も十分にあり得，そうすると自然な接続を妨げている要因を文法的範疇の問題として捉えることも難しくなる。
- (15) 例えば，佐久間まゆみ (1995) 「中心文の「段」統括機能」日本女子大学紀要，文学部，第44号，pp. 93－109など。佐久間まゆみの「段」認定と提題表現の関わりといった点から捉えるならば，同一の「段」に「段」認定の指標となる提題表現が必要以上に繰り返されていたり，一文の「段」が必要以上に連続したりするといったような捉え方ができるのではないかなどといったことが考えられる。